

「そうや、お常や」

「まだあんな事を言ふてる、お常やない、狐やと言ふね」

「そらお常は、色は白い、顔は長てで、目はチョツと吊り上つて居る、口が少し尖つてるで世間では狐やと悪口を言ふね」

「そうやない、狐と言ふ證據には、物を言ふたら仕舞には、コンと言ふで、能を氣を付けてみ」

「オイ源さん、それ正真か、私いは氣が付かんが、併し保平も知らんねやろうか」

「そら知らん能つてに、今まで添ふて依るね、お前が嘘やと思ふのんやつたら、私に付いておいで、聞かしたる」

「そうか、そんなら一緒に行かう……」

「オイ、喜いやん、見てみ、お常はん子供を寢さして、枕許で仕事をしてる、さあ、一緒に這入り、お常はん、今日は」

「オウ、誰方かと思ふたら、お二人連れで、どうぞ此方へお上り、コン」

「それ、どうや、今、言ふたやろう」

「フム、確かに聞へた、コンと言ふた」

「どうや、言ふやろうが、オイ、喜いやん、お前、がたく慄ふてるな」

「清やん、別に慄ふてるのんやない、こまかう身體が動いてるね」

「同じ事やがな、時にお常はん、保さんは、留守か」

「ヘエ、宅の人は、朝から、寺町の叔父さん所へ行きました、モウ歸つてきますやろ、どうぞ、お茶一つお上り、コン」

「清やん、又言ふた」

「そう、慄いないな……、サア、お茶を饗ばれ」

「いや、私いやめる、お茶やと思ふて飲んだら、馬の小便やも知れん」

「そんな事が有るもんか……、お常はん別に用事やないね、保さんが居てなら、日和が好い依つてに何處ぞへ、ぶら／＼行かうと思ふて、誘ひに來たんやが、留守なら仕方がない、歸つたら保さんに宜敷う言ふといてや」

「まあお愛想なしで御親切に宅の人が歸りましたらそないに申します、また寛くお遊びに、コン」

「そんなら、お常はん、保さんが歸へつたら、なるべく、尾を見せなや、さよなら、コン」

「オイ喜いやん」

「なんや」

「何を言ふね、コンやなんて、しやうむない事を、言ひないな、お常はんの顔の色が變つたがな」